



e-La Voz

「エー・ラ・ボス」と読みます

HCJB『アンデスの声』 日本語放送 メールマガジン (第19号)

2004年5月17日発行

シカゴ報告： 当たって砕けろ！ (Go For Broke!)

元日系二世部隊442部隊員 須田利雄

5月31日はアメリカではメモリアル・デイ(戦没者追悼記念日)です

私の名前は須田利雄、米国ワシントン州シアトル市生まれの日系二世です。1919年(大正8年)、私が5歳のときに母方の父が危篤になり、母に連れられて郷里福島に帰省。祖父の死後はアメリカには帰らずにそのまま祖母にあずけられて、小学校から師範学校まで日本で教育を受けました。格闘技が好きで、柔道は講道館の黒帯二段まですすみました。また、武士道に憧れてサムライの死のあり方こそ最も高尚なものだと感じていました。その頃オレゴン州で日本語学校の教員をしていた母から送られてくる聖書日課を読んでいると、「一粒の麦」のことが書かれていました。それを読んで非常におどろきました。サムライは名誉、責任をより重んじて自分の死であがなうことを最高としますが、そこには「死なば多くの実をむすぶ」と書いてあるではありませんか。それだけではなく、「一粒の麦」であるキリストは死んで、よみがえって、私たちにも滅びることのない永遠のいのちをくださるというのです。かたちはなくなっても生きつづけ、実を結ぶことができるのだ。そのことがだんだんにわかってきて、私の物の考え方や生き方が変わっていききました。師範学校を出て教員になりましたが、ある日、私が教室に蓄音機(レコード・プレイヤー)をもちこんで生徒たちにショパンのピアノ曲をきかせていたところ、校長が激怒してとびこんできました。西洋音楽など聞かせて怪しからん。国のためになる本でも読んでやれというわけです。日本全国で軍国主義の色が日増しに濃くなっていました。教育はもともと子供の芽を伸ばし育てていかなければならないのに、このままでは日本は駄目になる。国民を圧迫して自由をうばえば国は盲進するだけだ。私は将来に危機感をおぼえ県庁に辞表を提出、日本脱出を決行しました。横浜の波止場から「秩父丸」に乗って、太平洋を12日間航海したあと、サンフランシスコ(桑港)に着いたのが、1938年12月でした。桑港には母が出迎えにきていましたが、父はすでにオレゴン州のポートランドで病死していました。



1941年7月、私は軍隊に召集されました。医療衛生兵にまわされましたが、おそらく日系人には武器をもたせたくなかったからでしょう。基礎訓練を受けたあと、国内の陸軍病院配属となりました。その5ヵ月後、日本軍が真珠湾を奇襲攻撃、やっぱり来るものが来たなと思いました。当時日本が追いつめられるようになっていた国際情勢がわかっていただけに私の心境は半分半分でした。しかし米兵にすれば同じ軍服を着ていても日系人は敵国人です。どこへ行っても「お前はジャップか」ときかれ、いじわるされたり殴られたりすることが何度もありました。在米の日系人約12万人は強制的にカリフォルニア州、ワシントン州、オレゴン州などに分かれて収容所に隔離されました。市民権をもっている母国が敵対国だからという非人道的処置でした。「二つの祖国」をめぐる思いにゆれながら、日系二世の若者たちは団結しました。生まれた国、住んでいる国に対する忠誠を証明するには米軍の軍服を着て戦うしかない。勇気をふるって立ち上がった志願兵により日系二世部隊442部隊が編成されたのです。祖国はアメリカ、心は日本人としての名誉と誇りをもって敢えて激戦地へ赴き、「Go For Broke (当たって砕けろ!)」を合言葉に、すすんで弾丸の雨の中へ飛び出していったのです。日系二世部隊はヨーロッパ戦線で数々の武勲をたてましたが、それだけに死傷者の数もほかの部隊と比較にならないほどでした。その負傷者の手当てのために医療衛生分遣隊を至急補充しなければならなくなり、私もその一員としてイタリアへ派遣されることになりました。

イタリアのナポリ港に輸送船で着いてみると、世界に知られた美港も爆撃と戦火に見舞われ廃墟と化していました。上陸してトラックに分乗し陸路を北上する道すがら、はだしの子供たちが走ってきて手を出しキャンデーをねだっていました。私自身は病院勤務だったので最前線の戦闘には参加しませんが、1944年10月の奪取作戦は圧巻でした。ドイツ軍陣地の奥に取り残されたテキサス兵の大隊211人の救出に苦渋している米軍に万策尽きた師団本部から日系二世442部隊に出動命令が下ったのです。その時兵士たちは悪戦苦闘の末、ブリュエールの町を4年ぶりに解放したばかりなので疲れきっていたのです。兵士たちの中には自殺行為に等しいという者もいました。しかし、今ここで自分たちが死を賭して戦うことでアメリカ市民としての忠誠を証明することができる、そのことはまたアメリカの歴史における日系市民の将来を左右することにもなるのだ、これぞ好機来たれりと、800余人の死傷者を出した決死のバンザイ突撃を敢行し、ドイツ軍の反攻を退け包囲の壁をやぶって大隊を無事救出したのです。この快挙にアメリカは驚きました。トルーマン大統領は〈諸君は敵と戦っただけではなく、偏見と戦いに勝利した〉と賛辞をおくったほどです。このことが日系二世の優秀さを米政府はじめ米国民に認めさせたことは周知のとおりです。大戦終結後、私はナポリの港から米本土に帰国して除隊し、シカゴに住み母の紹介で結婚。日系新聞シカゴ新報や教会の管理責任などの仕事をしてきました。

短歌が私の趣味です。昔、講談社が編纂した『新万葉集』の本の中には、自作の短歌が2首出ています。シカゴでも『読書会』や『詩話会』などを主宰してきました。最後に拙句を3首紹介させていただきます。

イタリアの風に吹かれてつぶらなり ぶどう畑のいまだ青き実

砲煙にくすぶる戦火から立ちなおし、一日も早く平和がおとづれるようにと祈っての句です。

朝顔の花を数える今日生きて

この句は、現在アメリカの高校で「俳句教室」のテキストとして英訳されて使われています。

みずうみに素足をひたしふりむける 妻のほほえみ白く輝く

私たちは今年で結婚57周年を迎えました。今年2004年12月で私は90歳になります。長かった人生の旅路をふりかえってみて、やはり神様が私を支え、恵みをくださっていたことを今しみじみと感じます。生も死も神様からのギフトです。与えられたものには抵抗しません。何が起こってもそこにも神様がおられ、何かを語りかけておられるのだと考え、すべてをおまかせします。私は別に特別な人間ではないのですが、神様の営みのなかに生かされていると思えば感謝です。短歌は自然の営みに感動して句にうたいあげますが、今はその彼方にあるものまで神様をとおしてみせていただいているような心境です。

今日まで守られ きたりし我が身 つゆだにうれえし 行く末などは
いかなる折にも 愛なる神は すべてのことをば よきにし給わん
(リバイバル聖歌 186番)

HCJB日本語放送担当

在 住 尾 崎 一 夫 久 子

【ホームページのご案内】

HCJB日本語放送のホームページ(<http://www.hcjb.org/japanese/>)には、リスナー・コミュニケーションのためのふれあいコーナー「**フォーラム**」(<http://www.hcjb.org/japanese/forums/>)と、メールマガジンのバックナンバーを揃えた「**メールマガジン e-La Voz らいぶらり**」(<http://www.hcjb.org/japanese/mmz/>)のページがあります。どうぞご利用ください。

このメールマガジンは、HCJB日本語放送の管理するメール・リストに登録されている方に無料でお送りしています。

このメールマガジンをご覧になってのご感想やご意見、ご要望などは、[HCJB日本語放送](#)までお送りください。

また、このメールマガジンの配信停止、配信先変更、あるいは新規ご登録は、下の該当ボタンを選択し、必要事項をご記入の上、[この内容で送信する] ボタンをクリックして、手続きをお願いします。なお、Netscape 6.2以降をお使いの場合、このメールマガジンに埋め込まれているご登録手続きの機能はご利用いただけません。ご面倒ですが、[HCJB日本語放送](#)まで別途メールにてお知らせください。

配信の停止 (※重要:必ず現在メールマガジンの配信登録されているメールアドレスからご送信ください。)

配信変更先のメールアドレス
(※重要:必ず現在メールマガジンの配信登録されているメールアドレスからご送信ください。)

新規登録するメールアドレス

※お送りいただいた内容はメールリスト・サーバにより自動的に処理しますので、余分な内容は一切入れないでください。
※このメールマガジンはコンテンツが大きいので、携帯電話への配信はできません。



Copyright © 2004 by HCJB. All rights reserved.

日本語ホームページ: <http://www.hcjb.org/japanese/>

Eメール: kozaki@hcjb.org

郵便の宛先:

Mr. & Mrs. Kazuo Ozaki

1920 Berkshire Pl., Wheaton, IL 60187-8050, U. S. A.
